

スペイン風邪の猛威



“スペイン風邪”の感染防止のため、マスクを着用した女子学生（1920年2月）

甲南大学名誉教授 藤本 建夫

百年前の パンデミック

第一次世界大戦も終わりに近づきつつあるころ、いわゆるスペイン風邪（スペインインフルエンザあるいは流行性感冒）が1918（大正7）年3月にアメリカの陸軍基地から始まり、またたく間に全世界に流行し、1918年から1920（大正9）年にかけて世界人口約20億人のうち6億人前後が感染し、死亡者は2から4千万人に達したと言われている。いわゆるこのパンデミック（世界的大流行）は日本も例外とせず、1918年10月あたりから流行し始めた流行性感冒の感染力は猛烈さをきわめ、第一波のピーク時の11月には死亡者数は44,333人に達した。これで収まるかに見えた感冒は再び1919（大正8）年12月から急増しはじめ、第二波となって日本人を恐怖に陥れ、そのピーク時にあたる翌年1月には39,562人に達した¹。

この経済的時代背景を見れば、1918年11月1日に第一次世界大戦が終結し、戦前の世界秩序が一気に崩壊し、それと同時に戦後不況が到来する。この戦中から戦後にかけてスペイン風邪の第1波が猛威を振るう。1919年の5～6月より日米貿易を機に景気が回復に転じ、株も物価も高騰してゆく。他方感冒は12月あたりから再び牙をむき始め、農村

部でさえも話題は株で持ちきりで、新聞の話題は株と感冒の記事で埋めつくされた。だが感冒が下降に転じる翌年の2月あたりから経済も怪しくなり始め、そして3月15日には大恐慌が来襲する。

平生が体験した スペイン風邪

スペイン風邪の感染が減少に向かうと同時に大恐慌が襲ってくるのは、日本経済にとって何とも皮肉な巡り合わせだが、東京海上火災専務で大阪・神戸両支店長であった平生鈞三郎の目にはスペイン風邪はどのように映ったであろうか。彼の日記を読みながら百年前のスペイン風邪が今回の新型コロナウイルス禍としてそっくり再現されているのではないかという錯覚にとらわれる。

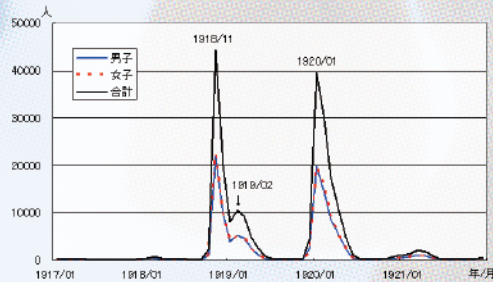
1918年10月23日の平生日記に次の記述が見られる。「世界の各方面に流行せるスペインインフルエンザの一種なるか、将又普通のインフルエンザなるか、我國の各部に流行し其勢猛烈にして小学校中には過半数の生徒がこの感冒に犯されたる為め、一時休校せしもの少なからず」。

このようにスペイン風邪というこのパンデミックすら利用して、平生は私利私欲にこり固まった日本の政治家を批判するのだが、まさにこのさなかの1919年4月21日に甲南学園が創立された。あれから百年、新型コロナウイルス禍の今、猖獗を極めるスペイン風邪流行の中で記した平生の社会的パースペクティブを甲南新世紀教育においても堅持していきたいものである。

参考文献

1 池田一夫ほか「日本におけるスペインかぜの精密分析」『東京都健康安全研究センター研究年報』第56号、2005年369・370ページ

インフルエンザによる死亡者数の月別推移



出典：東京都健康安全研究センター研究年報第56号
「日本におけるスペインかぜの精密分析」

らず。…世界的戦争と共に世界的感冒の蔓延を見る、奇といふべし」。しかし、外国での感染率と死者と比べると、例外的に「我國のものは寧ろ軽症」である。また11月1日の日記においても、新聞は大部分の紙面をこの記事にあて、死亡者数の急増の状況を大々的に報じているが、やはりこの感冒は「寧ろ軽症にして三日高度の体温を持続すれども、三四日にして治癒せざるものなし」と記している。

だが11月4日の日記には、この流行性感冒がただ者ではないことを記す。「流行性感冒は益々猖獗にして都鄙を風靡し至るところ其噂を聞かざるはなく、為めに死亡者の数益々多を加へ、火葬場の如き常に満員にして、数日の猶予を要するが如く、医師看護婦不足にして、病者には充分の手当を施す能はず、為めに死亡するもの少なからざるが如し。而してこの病因は未だ明確ならず。或は微菌なりとの説あるも明かならず。実に恐るべき伝染性を有するものといふべし」。

11月7日の日記には、火葬場がどこも満員で茶毘に付すことができず、兵庫県では応急策として露地で火葬することが許された。「実に惨暴の極といふべし」。ただこの感冒は「決して悪性のもの」ではないから、まず第一に咽喉を犯されるので、うがいが勧められている。悪性ではないとはいえ、「一時高熱を発するので脚気患者、妊婦、身体に障害がある者は高熱のため「余病を発して死に至るようである。「年若き母が孩児を残して永逝する惨状、実に名状すべからざるもの少なからず」。

11月11日には第一次世界大戦が終結し休戦条約が調印されたが、スペイン風邪は相変わらず猛威を振るい、平生家でも再発するケースが相次ぎ、11月13日の日記にはこう記す。「昨夜来又々すゞ子三郎、富美子、流行性感冒に罹り臥床、次で今朝五郎も又同病に罹り今や七名の患者、頭を駢べて平臥しつゝ、あり。而して看護

婦は全く跡を絶ちて招けども来らず。医師は繁忙と罹病とに依りて意の如く来診せず。実に困難名状す可からず。…余は余の生涯に於て嘗て如此き艱難を覚たることなし」。

実は平生も感冒に罹っている。11月18日の日記に、昨日より悪寒を感じ、解熱剤を飲みいつもより早く床についたが、今朝は快復しているものと体温を測ると、予期に反して37度を超えていた。今回の感冒で倒れた者の多くは「低度の発熱と侮りて最初に注意を怠りしものが、終に重患を伴ひて其犠牲となりしもの多数なれば、余は本日終日臥褥して体温の変化を試みるを可とし、業を休み平静に病の経過を見たりしが、夕刻に至るも体温の昂上を見ず」。平生はこの感冒の性格をよく熟知し、安静にしたために軽度で快復したのだが、平生家では23名中19名がこの病に罹ったにもかかわらず、一人の重患者もなく漸次快復して、今では3名の病者を残すだけとなった。この間一人の看護婦の手も借りずに順当に本復していったことは全く一同が誠心誠意を以て互に介抱し互に看護し、湿布水囊の交換は勿論、炊事掃除の事等、互に相助け相濟ふてこの好成績」をもたらしたと言える。

では東京の感染状況はどうなっていたのか。1919年2月2日の平生日記には以下のよう記されている。「流行性感冒は今や帝都を襲ひて其猛威を逞ふし、全都人口の半数はこの病に冒されつゝ、あるが如し。過去二週日の死亡実に千参百名に及び、為めに人心恟々たるが如し。青木蔵相等政府部内に於ける有力者にして病褥にあるもの少なからず。為めに政務に支障を来たすの恐あらんとす。実にインフルエンザこそ最も恐るべき伝染力を有するものにして、未だ確然たる研究の結果を見ざるも、若し免疫力微弱にして二三ヶ月にして再び病毒に感染する恐ありとせば、世界の人口はこの病魔の為に減退を免れざるに至らんか」。

スペイン風邪の 社会的・政治的意味

感冒は一時期下火になるが、1919年12月から翌年の春にかけて再び大流行が襲った。興味深い叙述が見られる。「流行性感冒は益々猛威を逞ふし阪神に於ける死亡数は例年に倍し、火葬場に於ては極の堆積を見、神戸に於ては止を得ず野焼を開始して整理しつゝ、あるの勢なり。…其ワクチンの注射が効果あるや否やにつきても異説紛々として統一せず。左れば其治療法に関しても一様ならず。然れども一昨年より昨年に互り流行せし時に感染せしものは再び冒されざるもの多数なる点より考ふれば、免疫性なること明かなるが如し」。

これほどの感染力に政府は何もできなかったのか。1920年1月14日の新聞に、内務省から各地方長官に、マスクをかけていない者は電車などに乗車させぬことの通達が出た、とある。

平生は第二波になると免疫の効果が出てきたことに注目しているが、そのことよりも病気は単なる病気として済まらず、その社会的政治的意味を問題にするのが平生らしい。特に1917年のロシア革命の成功で、世界で初の共産主義国家が成立したことに平生は関心を深めていた。1920年1月20日の日記には社会主義、平等主義とかかわらせて次のように論じている。この病は貴賤に別なく感染し死亡する。他方で「今や社会主義、平民主義は澎湃として全世界に漲り、過激主義も又この情勢を利用して其勢力範囲を拡張しつゝ、ある」が、これは平等主義を掲げる「破壊主義の前駆」かも知れない。もし疫病が「天下の政治家を戒むる天の声なりとせば、天はこの病魔を下して天下に残存せる不公平不公正なる政治を撲滅し、四民が各公平に福利を享受すべき公正なる政

『平生鈞三郎日記』全十八巻を刊行

学園創立者・平生鈞三郎が32年間にわたって書きつづった『平生鈞三郎日記』の翻刻が完成しました。



ご注文・ご購入に関するお問い合わせ
〔TSUTAYA BOOKSTORE 甲南大学 学友会館〕

Tel.078-441-7901
Fax.078-441-7915

